裏松固禅の住宅史研究資料に関する学際研究

―『院宮及私第図』と『諸家亭宅寝殿考証』―

主査　藤田　勝也*1
委員　京樂　真帆子*2，　岩間　香*3

『院宮及私第図』と『諸家亭宅寝殿考証』は、平安鎌倉時代の公家邸を中心に指図・関連記事を収集した資料集である。本研究ではこれら二書について考察し、主に以下の結論を得た。まず、前者は裏松固禅の編著だが、後者は再検討の必要がある。『院宮及私第図』諸本のうち、東京国立博物館所蔵本がもっとも善本といえる。『院宮及私第図』の成立は『大内裏図考証』と同時期である。邸の復元図も掲載されるが、その主目的はあくまで指図の資料集という点にある。それを反映して図配置の方針が不明確である。そして固禅の住宅史研究には善本収集の制約という限界があったが、絵巻物の選択にあたっては描写される建築の時期や内容が吟味されていた。

キーワード：1）院宮及私第図，2）諸家亭宅寝殿考証，3）裏松固禅，4）住宅史，5）近世，6）公家住宅，7）指図，8）明月記，9）絵巻物，10）模本

INTERDISCIPLINARY STUDY ON PUBLICATIONS WHICH KOZEN URAMATSU EDITED ABOUT THE HISTORY OF HOUSING

— On the "Inkyu-oyobi-shitei-zu" and "Shoke-teitaku-shinden-kosho" —

Ch.　Masaya Fujita
Mem.　Mahoko Kyoraku and Kaori Iwama

A "Inkyu-oyobi-shitei-zu" and a "Shoke-teitaku-shinden-kosho" are collections of drawings and data about aristocratic residences from Heian to Kamakura period.This research revealed several points. The "Inkyu-oyobi-shitei-zu" was drawn and written by Kozen Uramatsu from Tenmei times, but it is possible that "Shoke-teitaku-shinden-kosho" was not authored by Kozen. The best book is possessed in the Tokyo National Museum. Kozen described some restored drawings. But his purpose was to collect many drawings and data. A limit of his work was not to have a chance borrowing the best text. He tried to choose suitable pictures from picture scrolls as much as possible.

1　はじめに

本研究の目的は、裏松固禅（本名光世）の研究業績として知られている『院宮及私第図』、『諸家亭宅寝殿考証』（以下、各々『院宮』『諸家』と略称する）に詳細な検討を加えることにある。『諸家』に関しては固禅の著作ではない可能性があることから（2章）、『院宮』を重点的に分析する。具体的には、まず成立時期の推定、諸本の把握、そして掲載資料の検討を行う（3-5章）。さらにそれらを踏まえ、『院宮』で活用される古記録のうち、とくに『明月記』に焦点を絞り（6章）、また固禅が参照した絵巻物に注目することによって（7章）、固禅の研究・学問のあり方について多角的に論じる。以上をもって、固禅の研究の一端を明らかにするための基礎的知見としたい。

2　『院宮及私第図』と『諸家亭宅寝殿考証』の概要

『院宮』は、古代中世のおもに公家邸に関する指図を関連記事とともに集成した、指図を中心とする資料集である。指図には古記録等に掲載の図のほか、復元図として独自に作成した図や、絵巻物の情景をそのまま転写、あるいは平面図にあらためたものもある。現在、『院宮』の諸本として東京国立博物館、宮内庁書陵部、古代学協会、穂久邇文庫に所蔵されるものが知られている（以下、東博本、宮内庁本、古代学本、穂久邇本と各々略称する）。住宅・殿舎に関する固禅の研究では、平安京および平安宮、内裏に関する膨大な研究成果である『大内裏図考証』が早くから知られ、また関連して『皇居年表』も内裏の変遷を跡づけた研究としてこれまで注目されてきた。しかし『院宮』については本格的な分析はなされておらず、究明すべき課題は少なくない。

一方、『諸家』は内閣文庫に所蔵され、全7冊で朱書がある。平安・鎌倉時代の諸家の邸第に関する記事を集成し、第1、2冊は東三条殿、第3・6冊は院御所をはじめ諸邸、

*1 福井大学　助教授　　*2 滋賀県立大学　助教授　　*3 摂南大学　助教授

第７冊は藤原兼実の冷泉万里小路殿である。邸によって精粗があるが、邸の歴史、位置、建物配置、各建物、建具、絵画といった項目別に関連記事を集成する。『院宮』は指図類の基礎資料集、『諸家』は『大内裏図考証』の本文に相当し、『院宮』と『諸家』は両者セットで寝殿造の研究書を固禅は目指していたとの推測がある[文1)][文2)]。しかし『諸家』は第１、２冊の東三条殿が丁数にして全体の約63%、ついで第７冊の冷泉万里小路殿が約 17%を占め、この２邸に収集資料が偏在している点や、『院宮』とは取り扱う邸が必ずしも一致しないことなどから、両者を一連の資料とするにはさらに検討を要する。また『内閣文庫国書分類目録』（1975 年改訂版）は著者を「裏松光世」とするが、本文中に固禅著『皇居年表』を引用した後に「私案、」とあることから、固禅の編著自体を疑問視する見解がある[文3)]。また『院宮』では兼実の冷泉万里小路殿についての資料を〈55〉〈56〉（〈　〉は収載図・記事の通し番号を示す。詳細は 4-2）に掲載し、一方の『諸家』は第７冊すべてを同邸にあて詳細に記述する。〈55〉の指図は『諸家』でも繰り返し掲載されるが、しかし〈56〉の『玉葉』文治３年２月９日条については記事本文を掲載しても、所収指図は何故か掲載しない。ともに固禅編者とすると、これも不可解である。かように『諸家』の作成者については別途詳細な検証が必要であることが、今回の調査で判明した。

以上のことから、固禅の著作であることが明らかな研究資料として注目すべきは、『院宮』である。

3　『院宮』の成立時期

『院宮』の成立時期について、固禅の事績、とくに『大内裏図考証』の成立経緯に注目しつつ推論する。

裏松固禅（本名光世）は堂上歌壇の第一人者であった前内大臣烏丸光栄の末子として、元文元年(1736)11 月京都に生まれた。延享４年(1747) ７月、前権中納言裏松益光の養子となり、寛永年間に成立した堂上公家日野家流の裏松家を相続、12 月に従五位下に叙せられる。その後順調に昇進するも、同年７月竹内式部が京都所司代に拘束されるという宝暦事件によって、式部の門人の一人として出仕を止められ、所職を辞す。同年 12 月には養父益光が薨じている。宝暦 10 年(1760) ５月、四辻実長の末子謙光（公圭）を養子とし、同年７月落飾して固禅と号した[文4)]。

のちの『大内裏図考証』につながる宮城・殿舎の研究の開始は、明和２-３年(1765-6)頃であった。安永２年(1773)以降は藤貞幹が固禅の研究を補佐。安永７年(1778) ６月固禅は出行を許可され、天明４年(1784) ３月に『皇居年表』正編５冊が完成、摂政九条尚実に献上する。この頃には公家社会に固禅の研究は認知されていたという。その後天明４-６年『皇居年表』続編の編修作業に入るが、併行して『大内裏図考証』の第一次稿本の完成作業が行われていた。

天明８年(1788)正月の京都大火で内裏が焼亡。３月参内の許可が叶い、４月に内裏造営に関する諮問を朝廷よりうける。寛政２年(1790)11 月新造内裏が完成し、光格天皇が還御。寛政６年(1794) ５月に『大内裏図考証』の献上を朝廷から命ぜられる。前記の如く『大内裏図考証』正編の第一次稿本は天明年間までにほぼ作成済みで、続編の稿本もまた天明年間頃から存在したらしいが、献上の仰せを受けて以後、正編の下書本、清書本（献上本）の作成を本格化、寛政９年(1797)12 月に『大内裏図考証』正編 30 巻 50 冊を朝廷に献上する。その後さらに寛政 10 年(1798)以降享和３年(1803)まで、同書校訂本の作成につとめている。寛政 10 年(1798) ９月、内裏造営以来の御用勤仕と『大内裏図考証』献上の功により、朝廷から生涯金 30 斤を下賜される。文化元年(1804) ７月死去。満 67 才であった。

さて『院宮』成立の年次について詫間直樹氏は天明８年頃と推測し[文3)]、藤本孝一氏は天明８年(1788) ６月以降とする[文5)][文6)]。根拠を詫間氏は明示せず、藤本氏は場所を明示しないが「天明八年依　殿下仰之」を挙げる。これは古代学本〈40〉にある「天明八年四月依　殿下仰献之」のことと考えられる。また６月以降に特定されることから、同本〈44〉の末尾にある「猪隅殿御装束図以殿下［輔平公］御本写之天明八年六月廿九日」もその根拠と推測される。

〈44〉の当該箇所を東博本では「同図以殿下　［輔平公］御本写之于時天明八年十二月廿九日」のように６月ではなく 12 月とし、宮内庁本は「同図以殿下［輔平公］御本写之」とあるのみで、年次の記載を欠く。また〈40〉は、東博本では「天明八四依殿下仰献之」であり、先の古代学本がより明確である。宮内庁本にはかかる記載がない。いずれにせよこれらの書き込みから『院宮』の成立は天明８年以降に推測される。上記固禅の沿革の通り、天明８年３月参内許可され、４月には新造内裏に関して諮問を受け、また古儀採用の下問があった。また『裏松家史料』（東京大学史料編纂所蔵）の「勘物類」は天明８-寛政元年に集中し、とくに天明８年５-８月に突出して多いという[文7)]。そうしたことから、『院宮』編修のための資料収集作業もまたこの頃進められていたものと考えられる。

ただし、古代学本のみにみえる〈63〉「盛秀朝臣記関白第図」が、『大内裏図考証』続編にも「関白第」として掲載され、その『大内裏図考証』続編は、いわゆる第一次稿本にあって、作成時期は前記の通り天明年間中頃という[文3)]。また、京都府立総合資料館蔵『大内裏図考証』（27 巻、41 冊）の巻 15 上の裏紙に、『年中行事絵巻』巻１の東釣殿周辺が簡略な平面図として描かれる。『院宮』では〈38〉としてこの描写全体が詳細に図化されることになるが、裏紙の図はそのためのエスキースともいうべき趣をもつ。巻 15 上は『大内裏図考証』の第一次稿本であり、固禅自筆で藤貞幹の筆が混ざるという[文3)]。かように天明年間、『院宮』の資料収集は『大内裏図考証』と同時併行で進められていた様子が垣間見えるのである。

以上のように、資料収集の開始時期は天明年間に遡ることは疑いないが、ただし〈4〉「東三条殿図」の元史料と考えられる藤貞幹『東三条殿之図』の作成が寛政５年であることからすると[文8]、『院宮』の成立は寛政５年以後となる。内裏造営事業のほか『大日本史』などの校閲作業、欣子内親王の立后儀御用などで忙殺され、天明８年-寛政６年初頭まで『大内裏図考証』の校訂・清書作業に取りかかる時間的余裕は固禅にはほとんどなかったということも[文3]、その傍証となろう。

古代学本は『大内裏図考証』とセットで固禅が松平定信へ献上した自筆の清書本とされている[文6)文9]。自筆の正否はともかく『大内裏図考証』はおもに内裏関係、一方の『院宮』はその他公家邸に関する研究であり、両者を一連の仕事と固禅が考えていたことはまず間違い。『院宮』の編集は『大内裏図考証』と併行して行われた。というより、内裏関係は『大内裏図考証』、その他おもに公家邸関係の図は『院宮』としてまとめる構想だったのではないか。『大内裏図考証』は寛政６年に清書本の作成作業が本格化、寛政９年12月に正編50巻として朝廷へ献上、その後もさらに校訂作業がなされている。これと同時期に、『院宮』も本格的な作業に入ったものと考えられる。

『大内裏図考証』は献上後も固禅による校訂作業が文化元年(1804)の死去前年まで継続する。対して『院宮』の修訂作業については判然としない。仮に未実施とすると、固禅の研究の協力者、とくに藤貞幹の寛政９年(1797)８月死去という事態が、あるいは大きく影響していよう。

4　『院宮』の諸本

4.1　諸本の概要

本節では、東博本・宮内庁本・古代学本・穂久邇本の、巻数・法量・伝来等について概説する。

東博本（資料番号　2403）は、巻子本で全４巻（「其一」-「其四」として整理されるが、本紙に巻数は記されない。本稿では便宜上、「其一」を巻１、同様に巻２～４とする）（写真4-1、4-2）。法量は、縦はすべて491㎜、全長は巻１が19,937㎜、巻２が37,572㎜、巻３が17,453㎜、巻４が8,060㎜。稿本で、朱書がある。巻子裏の冒頭に各巻とも「院宮及私第図」と墨書する。伝来については紙幅の都合上、省略に委ねる。作成年次は未詳だが、同博物館は明治の写本としている。

宮内庁本（整理番号Ｂ７函462号）は、巻子本で全４巻。縦はすべて605㎜。稿本で朱書あり。縦380㎜の本紙に厚用紙で裏打ちし、巻子に装丁する。巻子裏の各冒頭に「院宮及私第之図」と墨書し、巻数「一」～「四」を明記する。『和漢図書分類目録　下巻』宮内庁書陵部編、1953年は、松岡辰方の旧蔵本とする。

古代学本[注1]は、巻子本で全２巻。２巻とも題簽に「院宮及私第図」と墨書するが、巻数は明示しない。黒川真頼の目録[文10]に従い、上・下巻に便宜上分けられている。上巻は縦393㎜全長20,414㎜、下巻は縦393㎜全長23,978㎜。本紙は薄用紙で、紙背が雲母引きの厚手楮紙で裏打ちし、巻子に装丁する。『大内裏図考証』とともに松平定信へ献上されたもので、図以外は固禅の自筆であり、原図を下書きにして本紙に写した清書本という。自筆本との評価の正否はともかく[注2]、筆致や、図と記事の整然とした配置から、清書本というのは間違いない（後述）。

穂久邇本については未公開で、今回は未調査である。しかし同本について『補訂版　国書総目録　第一巻』岩波書店、1989年が「院宮及私第図（いんみやおよびしていず）」の項をたて、巻子一軸で大永４年の成立であり、江戸末期の写しと解説するのは参考になる。成立年次の大永４年は、巻３冒頭の〈33〉が記す年紀「大永甲申」によるもので、

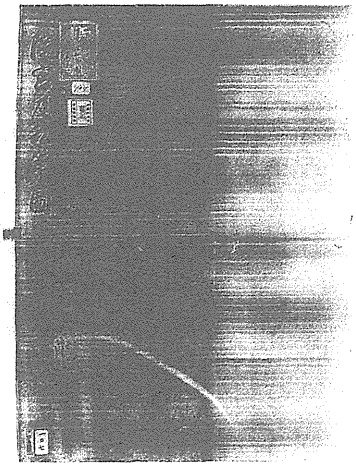

写真4-1　『院宮及私第図』東京国立博物館蔵
其一（巻１）の裏紙冒頭
(Image:TNM Image Archives　Source:http://TnmArchives.jp/)

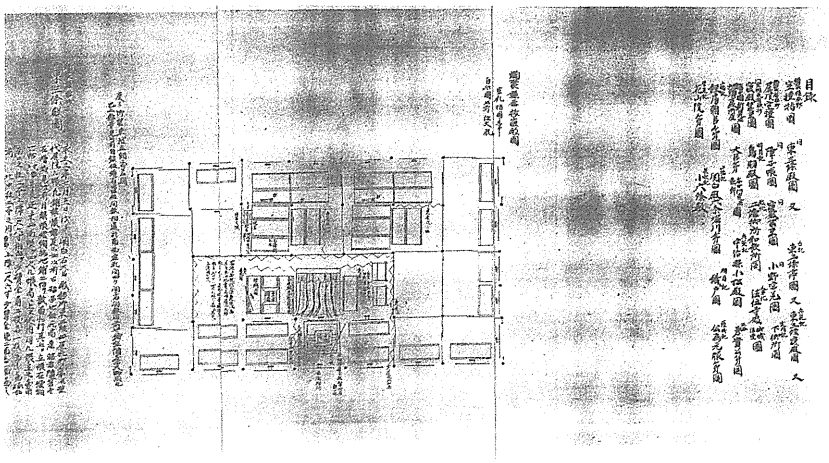

写真4-2　『院宮及私第図』東京国立博物館蔵
其一（巻１）の冒頭
(Image:TNM Image Archives　Source:http://TnmArchives.jp/)

表 4-1　『院宮及私第図』諸本の内容一覧（右頁につづく）

番号	図版・記事名	東博本　頭文目録	東博本　表題	出典	年月日	西暦
	其一（巻1）					
1	室礼指図	[類聚雑要抄]室礼指図	類聚雑要抄寝殿図	類聚雑要抄	延久1	1035
2	東三条殿寝殿図1	[同]東三条殿図	[類聚雑要抄]東三条殿図	類聚雑要抄	永久3・7・21	1115
3	東三条殿二棟廊・侍廊・随身所	又	東三条二棟指図、侍廊指図、台盤所指図、随身所指図	類聚雑要抄	永久3・7・21	1115
4	東三条殿図	なし	東三条殿	藤貞幹「東三条殿之図		
5	東三条殿寝殿図2	なし	類聚雑要抄東三条殿　（母屋大饗）	類聚雑要抄	永久4・1・23	1116
6	東三条殿寝殿西北1	なし	（題なし）　（母屋大饗）	類聚雑要抄	永久4・1・23	1116
7	東三条殿南庭	なし	同庭差図　（母屋大饗）	類聚雑要抄	永久4・1・23	1116
8	東三条殿寝殿3および西北2	なし	又　（庇大饗）	類聚雑要抄	保延2・12・9	1136
9	東三条殿寝殿図4	[台記]東三条亭図	台記　東三条亭図　（庇大饗）	台記	保延2・12・9	1136
10	東三条殿東対	又	（題なし）（学生参賀指図）	台記	保延2・12・21	1136
11	東三条殿神殿図	[兵範記]東三条寝殿図	兵範記　東三条神殿図	兵範記	仁平2・11・17	1152
12	東三条殿寝殿5、寝殿西北および神殿東方	又	東三条殿	兵範記	保元2・8・17	1157
13	屏風室礼図	[類聚雑要抄]屏風室礼図	類聚雑要抄　屏風室礼図	類聚雑要抄	寛治7以前	1093以前
14	障子帳図	[同]障子帳図	類聚雑要抄　障子帳図	類聚雑要抄	永保2～3	1082～3
15	寝殿御装束図	[同]寝殿装束図	類聚雑要抄寝殿装束図	類聚雑要抄	永保2～3	1082～3
16	小野宮殿図	[同]小野宮指図	類聚雑要抄小野宮差図	類聚雑要抄	永保2～3	1082～3
	↓続く	↓続く	↓続く	↓続く	↓続く	↓続く
17	足利義教の三条坊門殿（下御所）図	[建内記]下御所図	（題なし）（建内記）	建内記	永享2・7・24	1430
18	寝殿装束図	[門室相承有職抄]寝殿装束図	寝殿装束図	門室相承有職抄	鎌倉初	
19	鳥羽城南寺二棟廊図	[明月記]鳥羽殿図	鳥羽殿図	明月記	建仁2・5・26	1202
20	後鳥羽院御所二条殿の和歌所図	[殿記]二条御所和歌所図	二条御所和歌所図	後京極摂政記＋固禅復元図作成か？	建仁3・11・23	1203
21	法住寺殿御儀法堂図	[人車記]法住寺殿[御儀法堂]図	法住寺殿御儀法堂図	兵範記	嘉応1・6・17	1169
22	備中国新見庄地頭方政所屋図	[備中国新見庄地頭方政所屋]図	東寺古文書　備中国新見庄地頭方政所屋指図	東寺古文書	寛正年間	
23	『年中行事絵巻』巻10六月祓の貴族邸	大臣第[年中行事画戯餅]図	大臣第　年中行事画	固禅書写？		
24	宇治小松殿第	[兵範記]宇治県小松殿図	宇治小松殿第	兵範記	久安5・10・16-19	1149
25	皇嘉門院御所	[玉海]兼実公第図	兼実公第	玉葉	承安5・3・7	1175
26	吉田経房第1	[山槐記]経房朝臣第図	経房朝臣第	山槐記	治承3・1・10	1179
27	関白基通六条堀川第1	[山槐記]関白殿六条堀川第図	関白殿六条堀川第	山槐記	治承4・2・11	1180
28	織戸中門	[明月記]織戸図	織戸	明月記	元久2・12・15	1205
29	西園寺公為元服第図	[薩戒記]公為元服第図	園太暦　公為元服	園太暦	貞和4・12・21-22	1348
30	室町時代の花山院	[管見記]花山院第図	花山院元服	薩戒記	応永25・2・24	1418
31	西園寺邸	なし	西園寺侍従実遠元服	管見記	嘉吉2・12・15	1442
32	小六条殿図	[長秋記]小六条殿図	小六条殿図	長秋記	天永1・1・3	1131
	其三（巻3）					
33	本槐門図	本槐門新槐門図	本槐門			
34	新槐門図		新槐門			
35	古代大臣家図	大臣第宅古図	古図			
36	古図	両中門古図	古図　両中門			
37	両中門図	又	両中門図			
38	『年中行事絵巻』巻1朝観行幸の仙洞図	[年中行事画]仙洞図	仙洞図[年中行事絵巻物　朝観行幸]	年中行事絵巻		
39	『年中行事絵巻』巻6臨時客の東三条殿東対図	[同]又	東対図[年中行事絵巻物臨時客]	年中行事絵巻		
40	寝殿図	寝殿図	寝殿図　拠後京極殿第図之	固禅作成	寛文2	1662
41	近衛殿1	[勘仲記]高山寺殿寝殿図	勘仲記所載高山寺殿大饗図	勘仲記	弘安11・10・27	1288
42	近衛殿2	又	高山寺殿寝殿大饗図	41から転写		
43	猪熊殿1	[勘仲記]猪熊殿寝殿図	勘仲記所載猪熊殿寝殿図	勘仲記	建治2・12・14	1276
44	猪熊殿2	又	猪熊殿寝殿図	43から転写		
44＋	猪熊殿3	又	（猪熊殿御装束図）　43と同図を再掲する	43を再掲＋勘仲記の記事を追加		
45	藤原定家の一条京極第	（前）[明月記]定家卿第図	京極貴門定家卿第図	明月記＋固禅復元図作成	嘉禄2・11・8-12・22	1226
					嘉禄3・11-12・14	1227
					寛喜3・3・28、同年7・3	1231
					安貞3・3・2	1229
	↓続く	↓続く	↓続く			
46	花山院	[山槐記]花山院大相国亭図	花山院大相国亭図	山槐記	治承3・4・21	1179
47	六波羅泉殿1	[同]入道大相国六波羅亭図	入道大相国六波羅亭	山槐記	治承2・10・25	1178
48	六波羅泉殿2	[同]同御産所指図	山槐記　御産所図	山槐記	治承2・11・21	1178
49	左大臣源有仁の冷泉東洞院第	（後）[台記]左大臣冷泉亭図	左大臣冷泉第図	台記	保延2・12・13	1136
50	関白基通の六条堀川第2	[山槐記]関白基通公第図	関白基通公第図	玉葉	治承3・12・14	1179
51	権大納言樋口大宮第	[明月記]大宮大納言樋口第図	大宮大納言樋口第図	明月記	建久7・4・24	1196
52	吉田経房第2	[山槐記]右中弁経房朝臣亭図	右中弁経房朝臣亭図	山槐記	治承3・1・10	1179
53	白川福勝院1	[兵範記]白川殿図	白川殿図	兵範記	久寿3・1・24	1156
54	白川福勝院2	[同]又	白川殿図	兵範記	仁平3・4・8	1153
55	九条兼実の冷泉万里小路第1	[玉海]兼実公第	兼実公第図	玉葉	文治3・1・3	1187
56	九条兼実の冷泉万里小路第2	なし	兼実公第図	玉葉	文治3・2・9	1187
57	『年中行事絵巻』別本巻3安楽花に描かれる朽ち果てた屋敷	[年中行事画]寝殿図	年中行事画見雑芸図	年中行事絵巻		
58	『石山寺縁起絵』巻5に描かれる式部少輔国能第	[石山寺縁起]式部少輔国能第図	石山寺縁起所図正五位下式部少輔国能[本名国親]第	石山寺縁起	天治年間頃	1124-6
59	『なよ竹物語』第3に描かれる陰陽師文衡の邸	[奈与竹物語]陰陽師文衡家図	陰陽師文衡家[見奈与竹物語]	なよ竹物語	後嵯峨天皇頃	
60	『なよ竹物語』第5に描かれる鳴渡少将第	[同]鳴渡少将第図	鳴渡少将第[見奈与竹物語]	なよ竹物語	後嵯峨天皇頃	
61	足利将軍御所の室町殿	室町殿寝殿図	室町殿寝殿図[所々指図]	？	永享4？	1432
62	『泣不動縁起絵巻』に描かれる三井寺智空坊図	[証空絵伝]三井寺智空坊図	三井寺智空大師坊図[証空上人縁起]	泣不動縁起絵巻	15世紀	
63	――	――	――			

また一軸ということから、東博本の巻３に相当するものとの推測が可能である。

4.2　全体構成と諸本の特徴

まず全体構成について東博本を中心に概観する（表 4-1 参照）。巻１と３は記録類等を中心に指図・関連記事を集成したもの、これに対し巻２と４は大半が絵巻物の描写で、巻４は『年中行事絵巻』巻８である（詳細は７章）。巻１は〈1〉－〈32〉、巻３は〈33〉－〈62〉で、掲載数はほぼ等しい。なお前記した通り〈63〉は古代学本のみにみえる。

東博本と他の諸本の構成を比較する。宮内庁本は東博本と同じく全４巻、古代学本は全２巻である。ただし東博本の巻２、４の２巻分は、宮内庁本・古代学本に存在しない。後述するように東博本と宮内庁本は同系統に位置づけられるが、東博本巻１は、宮内庁本では巻３および巻４、東博本巻３は同巻１および巻２に相当する。宮内庁本は、巻１は「第一上」、巻１は「第一下」、巻３は「第二上」、巻４は「第二下」とも記され、頭文目録は巻１・巻３の冒頭にまとめられる。そこで本来は巻１と２、巻３と４で各１巻の全２巻構成であったかもしれない。古代学本の上巻は東博本の巻１、下巻は巻３に対応する。以上のように、宮内庁本と、東博本・古代学本では巻の順序が逆転する。また古代学本で冒頭に「目次」と記されるのは下巻のみで、上巻にはない。そこで古代学本の上・下巻の順序は、本来は逆との推測があり[文3)]、これは東博本にもあてはまる。東博本の巻３に内容的に一致する他の資料が『院宮』とは

	邸名	儀式	宮内庁書陵部本　頭文目録	宮内庁書陵部本　表題	古代学本　頭文目録	古代学協会本　表題　※参考文献12に未掲載
			三　第二上		(上巻)	
1	高倉殿	移徙	[類聚雑要抄]室礼指図	類聚雑要抄寝殿図	室礼指図事	室礼指図事
2	東三条殿	移徙	[同]東三条殿図	[類聚雑要抄]東三条殿図	東三条殿図	東三条殿図
3	東三条殿	移徙	又	東三条二棟指図	又	又(二棟指図、台盤所指図、随身所指図、随身所指図)
4	東三条殿		なし	東三条殿	又	又
5	東三条殿	正月大饗	なし	類聚雑要抄東三条殿	東三条殿寝殿図	東三条殿図
6	東三条殿	正月大饗	なし	(題なし)	又	又
7	東三条殿	正月大饗	なし	同庭差図	又庭指図	又庭指図
8	東三条殿	任大臣大饗	なし	(題なし)	又	又
9	東三条殿	任大臣大饗	[台記]東三条亭図	台記　東三条亭図	台記東三条殿図	又神殿図
10	東三条殿	勧学院学生参賀	又	(題なし)	又	又
11	東三条殿	神殿御神楽	[兵範記]東三条寝殿図	兵範記　東三条神殿図	兵範記東三条殿図	東三条殿神殿図
12	東三条殿	任大臣大饗	又	東三条殿	又	又
13	伏見邸	移徙	[類聚雑要抄]屏風室礼図	類聚雑要抄　屏風室礼図	屏風室礼図	屏風室礼図
14	小野宮	婿取	[同]障子帳図	同抄　障子帳図	障子帳図	障子帳図
15	小野宮	婿取	[同]寝殿装束図	類聚雑要抄寝殿装束図	寝殿御装束図	寝殿御装束図
16	小野宮	婿取	小野宮差図	同抄小野宮差図	小野宮殿差図	小野宮殿差図
	↓続く	↓続く	四　第二下		↓続く	↓続く
17	三条坊門殿	御拝賀出立	[建内記]下御所図	(題なし)建内記	建内記下御所図	下御所図※
18			[門室相承有職抄]寝殿装束図	寝殿装束図	門室相承有職抄寝殿装束図	寝殿装束図
19	鳥羽城南寺	影供歌合	[明月記]鳥羽殿図	鳥羽殿図	明月記鳥羽殿図	鳥羽殿図
20	二条殿	九十賀	[殿記]二条御所和歌所図	二条御所和歌所図	殿記二条御所和歌所図	二条御所和歌所図
21	法住寺南殿	落飾	[人車記]法住寺殿御懺法堂図	法住寺殿御懺法堂図	人車記法住寺殿御懺法堂図	法住寺御懺法堂図
22			[備中国斬見庄地頭方政所屋]図	東寺古文書　備中国斬見庄地頭方政所屋指図	備中国斬見庄地頭方政所屋図	地頭方政所屋図
23			大臣第[年中行事画載餅]図	大臣第　年中行事画	年中行事画大臣第図	大臣第年中行事画載餅図
24	宇治小松殿	元服	[兵範記]宇治県小松殿図	宇治小松殿第	兵範記宇治県小松殿図	宇治県小松殿図
25	皇嘉門院九条殿	元服	[玉海]兼実公第図	兼実公第	玉海兼実公第図	兼実公第
26	勘解由小路万里小路第	元服	[山槐記]経房朝臣第図	経房朝臣第	山槐記経房朝臣第図	経房朝臣第図
27	六条北堀川西第	元服	[山槐記]関白殿六条堀川第図	関白殿六条堀川第	山槐記関白殿六条堀川第図	関白六条堀川第図
28	内大臣実宗邸	元服	[明月記]織戸図	織戸	明月記織戸図	織戸図
29		元服	[薩戒記]公為元服第図	圃太暦　公為元服	圃太暦公為第図	為公第図※
30	花山院第	元服	なし(29～31は目次と内容に混乱)	花山院元服	西園寺第図	西園寺第図※　花山院第の誤り→目録・内題の誤記
31	西園寺邸	元服	「管見記」花山院第図	西園寺侍従実遠元服	管見記花山院第図	花山院第図※　西園寺第の誤り→目録・内題の誤記
32	小六条殿	臨時客	[長秋記]小六条殿図	小六条殿図	長秋記小六条殿図	小六条殿図
			一　第一上		(下巻)	
33			本槐門新槐門図	本槐門新槐門図	本槐門新槐門図	本槐門
34			大臣第宅古図	(題なし)(新槐門)	大臣第宅古図	大臣第宅古図
35				古図	(目次は脱)	両古門図
36			両中門古図	古図　両中門	両中門古図	両中門古図
37			又	両中門図	又	又
38			[年中行事画]　仙洞図	仙洞図[年中行事絵巻物　朝覲行幸	年中行事画仙洞図	年中行事画仙洞図
39			[同]　又	東対図[年中行事画巻物]	又	又
40	九条兼晴邸		寝殿図	寝殿図　拠後京極殿第図之	後京極殿寝殿図	後京極殿寝殿図
41	近衛殿	任大臣大饗	[勘仲記]　高山寺殿寝殿図	勘仲記所載高山寺大饗図	勘仲記高山寺殿寝殿図	高山寺殿寝殿図※
42			又	(なし)	又	又※
43	猪熊殿	吉書拝見	[勘仲記]　猪熊殿寝殿図	勘仲記所載猪熊殿寝殿図	勘仲記猪熊殿寝殿図	猪熊殿寝殿図※
44			又	(題なし)(猪熊殿寝殿図)	又	又※
44＋			又	(猪熊殿御装束図) 43と同図を掲載する		
45	一条京極第		[明月記]　定家卿第図	京極黄門定家卿第図	明月記定家卿第図	定家卿第図
			二　第一下		↓続く	↓続く
46	花山院	賀茂祭出立	[山槐記]　花山院大相国亭図	花山院大相国亭図	山槐記花山院大相国亭図	花山院大相国亭図
47	六波羅泉殿	孔雀経法	入道大相国六波羅亭図	入道大相国六波羅亭	山槐記入道大相国六波羅亭図	入道大相国六波羅亭図
48	六波羅泉殿	御産	[同]　同御産所指図	山槐記　御産所図	山槐記、六波羅亭御産所図	同御産所図
49	冷泉北東洞院東邸	慶賀	[台記]　左大臣冷泉亭図	左大臣冷泉亭図	台記左大臣冷泉亭図	左大臣冷泉亭図
50	六条北堀川西第	拝賀	[山槐記]　関白基通公第図	関白基通公第図	山槐記関白基通公第図	関白基通公第図
51	樋口大宮第	賀茂祭出立	[明月記]　大宮大納言樋口第図	大宮大納言樋口第図	明月記大宮大納言樋口第図	大宮大納言樋口第図
52	勘解由小路万里小路第	元服	[山槐記]　右中弁経房朝臣亭図	右中弁経房朝臣亭図	山槐記、右中弁経房朝臣亭図	右中弁経房朝臣亭図
53	白川福勝院	忠実娘高陽院の追善供養	[兵範記]　白川殿図	(題なし)	兵範記白川殿図	白川殿図
54	白川福勝院	御灌仏	[同]　又	白川殿図	又	又
55	冷泉万里小路第	臨時客	[玉海]　兼実公第	兼実公第図	玉海兼実公第図	兼実公第図
56	冷泉万里小路第	作文始	[同]　又	兼実公第図	又	又
57	朽ち果てた邸		[年中行事画]　寝殿図	年中行事画見雑芸図	年中行事画寝殿図	年中行事画寝殿図
58	国能邸		[石山寺縁起]　式部少輔国能第図	石山寺縁起所図正五位下式部少輔国能[本名国親]第	石山寺縁起画式部少輔国能第図	石山寺縁起画式部少輔国能第図
59	陰陽師邸		[奈与竹物語]　陰陽師文衡家図	陰陽師文衡家[見奈与竹物語]	奈与竹物語陰陽師文衡家図	奈与竹物語陰陽師文衡家図※
60	三条白川少将邸		[同]　鳴渡少将第図	鳴渡少将第[見奈与竹物語]	奈与竹物語鳴渡少将第図	奈与竹物語鳴渡少将第図※
61	室町殿		室町殿寝殿図	室町殿寝殿図	室町殿寝殿図	室町殿寝殿図※
62			[証空絵詞]　三井寺智空坊図	三井寺智空大師坊図[証空上人縁起]	証空絵詞、三井寺智空坊図	証空絵詞、三井寺智空坊図
63			――――	――――	盛秀朝臣記関白第図	盛秀朝臣記関白第図※

異なる呼称で複数見いだせるという事実もある[注3)]。ただし東博本では巻1－3のいずれも冒頭に「目録」と記し、宮内庁本では巻1、巻3ともに冒頭に「目録」と記す。

次に図や引用記事の内容を比較すると、東博本と宮内庁本が多く共通するのに対し、古代学本のみ異なる点が数多い。また図の位置や引用史料の改行位置といった体裁も二本はおおむね一致し、文字の大きさや筆致まで似通っている。〈63〉は古代学本のみで東博本や宮内庁本にはないことは前記した。東博本と宮内庁本は同一系統で、古代学本とは区別される。そこで便宜上、東博本・宮内庁本を東博本系、古代学本を古代学本系と仮称する[注4)]。

東博本系に比べ古代学本系には明白な誤字脱字が多く認められる。たとえば〈3〉にある東三条殿の侍廊の指図を「随身所指図」と誤った表題をつけ（その結果、随身所の異なる指図が2点となる）、〈20〉では正しくは「建仁三年」のところ「建仁二年」とし、〈46〉では正しくは「治承三年」のところ「治承二年」と誤る。また〈51〉には『明月記』の引用文に 12 文字分の欠落がある、といった具合である。その他、〈30〉「花山院元服」は花山院に関する『薩戒記』の記事、〈31〉「西園寺侍従実遠元服」は西園寺邸に関する『管見記』の記事であるが、古代学本は〈30〉の目録、表題を各々「西園寺第図」「西園寺第」と誤り、〈31〉を目録、表題ともに「花山院第図」と誤る。さらに〈29〉「公為第図」のところ、古代学本は「為公第図」と誤る。

一方、東博本系にも〈50〉で、『玉葉』を引用しながら『山槐記』と記すなど明白な誤記があり、古代学本は『玉

葉』と正しく記す。ただし東博本は「此記若他記也、不審」と傍書する。また〈44〉で東博本が鷹司輔平から『勘仲記』を借り出した月を12月と記すのは事実関係が合わず、古代学本の6月が妥当である[注5)]。

図はどうか。古代学本系は粗雑であり事実関係に誤認がある。たとえば〈4〉の東三条殿図では、「二棟出居」の北方（東対の東北方）を記載せず、柱や妻戸の記載にも不備があり、遣水も描かないといった点で古代学本系は見劣り、また〈40〉の寝殿図では、「母屋」や背面、左方の「廂」の記載がない、妻戸を描写しない、寝殿左方の建物内部を左右に間仕切らない、中門の扉を描かない、中門廊外側簀子の高欄を描かないなど、東博本系とくに東博本に比べ古代学本は描写内容に不備が目立つ。しかし一方で〈19〉では影供歌合会場における柿本人麻呂像について古代学本は「影」と正しく、東博本系は「題」と誤る（6-2参照）。

こうした異同について、元史料が記録類等の場合、参照した元史料（写本）自体に起因するのか、あるいは書写者のミスかの両方の可能性がある。しかし元史料が記録類等でなく東三条殿図のような単独の指図の場合には、後者の書写者に起因する可能性が高いように思われる。とまれ、東博本系の方が古代学本系より善本であるにもかかわらず、善本でない古代学本系に何故清書本が伝来するのか、諸本の関係をめぐって今後の大きな課題である。

次に、東博本と宮内庁本を比較すると、宮内庁本は東博本に比べ誤字脱字が多く、図にも東博本より不備がある。また宮内庁本は前記したように東博本巻2・4に相当する巻を欠く。東博本は宮内庁本に比べ善本である。

なお東博本・宮内庁本をみると、ともに収載される各資料間の文字の筆致や大きさは様々で、図の表現や大きさも様々である。また図と文字で構成される各資料の全体はほぼ矩形の範囲に収まり、図を避けるように文字が配置される状況が看取できる。これら表記上の特徴は、稿本であることを示唆し、かつ『院宮』作成の経緯を反映する。

すなわち、資料は当初紙片で収集された。紙片は矩形だが、大きさはまちまちであった。紙片には根拠となる引用資料のうち、まず図が描かれ、つぎに余白に文字が適宜記されたのだろう。こうして紙片として作成、収集された多くの資料の文字や図の大きさ・筆致は様々であった。資料収集には、固禅以外に複数の協力者が関与し、中には『大内裏図考証』の協力者も含まれよう。それら多様な紙片の表記・内容は、同一の大きさの巻子に忠実に書写された。掲載資料中には、たとえば〈19〉-〈21〉など図名や邸名を□で囲む描写がある。紙片段階では貼紙であったその輪郭までもが忠実に書写された。つまり□は貼紙の輪郭を示すものとも考えられるのである。

古代学本では、各資料の体裁は整えられ、均一の大きさに収められている。筆致も丁寧で首尾一貫している。また東博本系では〈43〉『勘仲記』の猪熊殿寝殿図を〈44〉の後に『勘仲記』の関連記事とともに再掲するが、古代学本では記事のみの掲載で図は割愛する。資料配置がこうして調整されているのも、古代学本の清書本らしい特徴である。

5　『院宮』の内容と性格

ここではとくに東博本巻1・巻3の資料配列と内容の検討を通して、『院宮』の性格について論じたい。

まず巻1冒頭〈1〉を除く〈12〉までが東三条殿である。〈1〉は東三条殿ではないが、固禅の誤認とすると、同邸を冒頭にまとめる方針は明快である。その東三条殿の配列は年次順である。儀式内容で一括しているかにみえるが、保延2年(1136)と保元2年(1157)の任大臣大饗が隣接せず、年次順によっている。また保延2年12月9日条の『類聚雑要抄』と『台記』では、『類聚雑要抄』を先に挙げる。出典ごとにまとめようとする姿勢がここにうかがえる。

次に、他邸の場合、東三条殿のように同一の邸が異なる資料で複数の項目を持つのは、巻3〈47、48〉の六波羅泉殿、〈53、54〉白川福勝院、〈55、56〉冷泉万里小路殿である。いずれも連続し、同一邸を一所にまとめる意図がここでもうかがえる。ただし白川福勝院〈53、54〉は年次順でなく、同一邸は年次順という先の方針は貫徹しない。

多くを占める一邸一項目の場合はどうか。注目されるのは、巻1〈24-31〉である。異なる邸だが儀式内容は元服で共通し、同一儀式をまとめる方針が明確である。そのうえで久安5年（1149）から嘉吉2年（1442）に至る元服事例を年次順に配列する。しかし、一邸一項目では同一儀式をまとめる、というこの方針もまた貫徹しない。巻3では賀茂祭出立が邸の異なる〈46〉と〈51〉で離れている。

以上、東三条殿を冒頭に置くという原則以外に、基本方針は中途半端で貫徹しない。〈27〉〈50〉は異なる資料とはいえ同一邸、〈26〉〈52〉に至っては同一資料の重複である。しかもともに元服で、同じ儀式をまとめる方針が貫徹しないことが、ここにも顕在化している。こうした配列のあり方は、未完によるものか、編集方針の定まらない資料集としての性格を反映するものとも考えられる。

資料内容では古記録類の所収指図、儀式の資料集である『類聚雑要抄』掲載の指図、『年中行事絵巻』をはじめとする絵巻物の描写を平面図化したものが大半を占め、ほかに〈33〉〈34〉の室町時代作成の図、〈22〉の古文書からの指図の引用もあり、資料は広範囲におよぶ。また平安末から鎌倉時代を主体としつつ、〈61〉の如く室町時代15世紀にまで広がりをもつのも特徴である。

さて、『院宮』は固禅作成の復元図が掲載されることでも注目されてきた[注6)]。古記録類などに未確認の図など〈4〉〈20〉〈36〉〈37〉〈40〉〈45〉〈61〉がさしあたり該当する。しかし〈4〉は固禅作成でなく[文8)]、〈36〉〈37〉も転載図の可能性がある。〈40〉は固禅作成と考えられるが復元図とは言い難い[文14)]。また〈61〉も判然としない。固禅によ

る復元図とほぼ確実にいえるのは〈20〉〈45〉のみとなる。両者のうち〈45〉に「拠明月記、固禅試作此図」とあるのは一応その根拠となり得るが、〈20〉に固禅復元の確証はなく推定に留まる。このようにみると、固禅が『院宮』で意図したのは邸の復元ではなく、『院宮』はあくまで図の資料集としての性格にその本質があるといえる。

6 『院宮及私第図』指図と『明月記』

本章では、『院宮』収載の古記録を固禅がいかに入手し、検討を加えていったのかを考察することで、固禅の故実研究の実態に迫りたい。『院宮』の主体は古記録に掲載される行事に関する指図、いわゆる行事指図である。そこでまず行事指図の性格を確認し、そのうえで『院宮』収載の古記録のうち、とくに『明月記』に焦点を絞って検討する。

6.1 行事指図とは何か

行事指図は建築の復元研究で活用されてきた。しかし、それらがどういう目的で作成され、同時代の人々がどのように利用してきたのか、つまり、図に含まれる情報とは何かを考える研究は管見の限り見あたらない。以下では、古代・中世の指図・絵図の使い分けを解明した後藤久太郎氏の研究に導かれながら検討していく[文15]。

まず、11 世紀前半までの状況を把握するため、古記録に見える「絵」、「図」という言葉を整理した（**表 6-1**）。ただし建築とは無関係の絵仏、特殊な図像である宋人絵図（『小右記』万寿４年８月 30 日条など）・珍魚絵図（『小右記』長和２年６月 22・28 日条）は除外した。

その結果、行事指図は「指図」・「図」と表記され、「式」とセットで活用されることがわかる。たとえば長保元年（999）慈徳寺供養において、行事のマニュアルとして、文字で書かれた「式」と図で示す「指図」とが用意されている（『権記』同年８月 21 日条）。こうした「指図」は、行事の事前に配布され（『御堂関白記』長和５年（1016）正月 25 日条）、装束担当の部局に周知されたものと考えられる。こうした行事指図は、特に従来とは違う方式で行事を執行する際に重視され、たとえば長和５年（1016）後一条天皇即位式を新しい形態で実行することにした藤原道長の意を汲み、藤原公任が式と指図とを新しく作成したことにも示されよう（『左経記』同年正月 29 日条）。この時、紫宸殿の敷設などについては「式」（旧来の式）に従い、儀式の次第については「新式」に示し、陣形や国璽の位置は「指図」に従うように、との道長の命令が出されている。つまり「指図」は文字マニュアルである「式」ではカバーできない箇所を図化したものであることがわかる。

表 6-1 古記録にみえる「絵」「図」一覧

	史料名	年月日	西暦	史料語	使用目的	分類	備考
1	貞信公記	天暦1.9.2	947	図	御願堂建設	伽藍配置図か・計画図	
2	小右記	寛和1.10.25	985	指図	大嘗会御禊	仮屋配置図	
3	権記	長保1.8.13	999	指図	慈徳寺供養	敷設図	行成が準備
4	権記	長保1.8.21	999	指図	慈徳寺供養	敷設図	式とセット
5	権記	長保2.10.17	1000	指図	？	？	宋人図か行啓敷設図か
6	小右記	寛弘2.3.8	1005	指図	大原野行啓	行列図	
7	御堂関白記	寛弘2.1019	1005	指図	浄妙寺三昧堂供養	敷設図	座席表か？
8	小右記	寛弘8.7.20	1011	絵図	一条天皇埋葬	境内絵図	埋葬場所をマーク
9	小右記	寛弘8.8.21	1011	絵図	大嘗会	配置図か敷設図	前例の中に絵図
10	権記	寛弘8.10.2	1011	指図	大嘗会御禊	行列図	直簿とは別に作成
11	小右記	長和2.3.30	1013	絵図	希泉院・神泉苑絵図	邸宅絵図	飛鳥部常則の作・「太優美」
12	小右記	長和2.9.16	1013	図	三条天皇行幸	？	「立楽図」・オリジナルか？
13	御堂関白記	長和5.1.25	1016	指図	後一条天皇即位	敷設図	大外記に渡す
14	小右記	長和5.1.29	1016	指図	後一条天皇即位	敷設図	式とセット
15	左経記	長和5.1.29	1016	指図	後一条天皇即位	敷設図	式とセット・藤原公任が作成
16	御堂関白記	長和5.10.22	1016	図	大嘗会御禊	行列図か	
17	小右記	寛仁1.11.29	1017	絵図	所領寄進	国絵図	彰子による賀茂社への寄進
18	左経記	寛仁1.11.29	1017	絵図	同上	同上	同上
19	小右記	寛仁1.12.1	1017	絵図	同上	同上	
20	小右記	寛仁2.5.23	1018	絵図	同上	同上	
21	小右記	寛仁2.6.11	1018	絵図	同上	同上	
22	小右記	寛仁2.6.16	1018	図	同上	同上	画工が作成
23	小右記	寛仁2.11.25	1018	絵図	同上	同上	
24	小右記	寛仁4.閏12.17	1020	絵図	所領争論	所領絵図	延暦寺と賀茂社の争論
25	小右記	治安1,1.16	1021	図	踏歌	名簿	「踏歌図」・配列もか・指図とも
26	左経記	治安2.10.24	1022	指図	北野社行幸	仮屋配置図	後一条天皇・「穏」
27	小右記	治安3.1.16	1023	図	踏歌	名簿	「踏歌図」・配列もか・指図とも
28	小右記	長元3.9.20	1030	指図	八省院・豊楽院渡営	計画図	諸国苑も記載か

このように「指図」は行事毎に作成される装束に関するマニュアルとして機能したことが確認される。これは、寛弘８年（1011）の大嘗会御禊行幸の準備について、行事を担当した藤原行成が残した日記からもわかる。すなわち、行幸に従う者たちが持つ内器仗・主器仗については「鹵簿」に載っており、鈴を馬に背負わせることは「指図」に載っている、とする。ここで、「鹵簿」と「指図」という２種類の図が用意されていることがわかる。さらに、主器仗については「鹵簿」には載っているが、従来実行されたことがない、内器仗については先例を調査し、法家に諮問した上で「指図」に載せよ、とあることに注目したい。すなわち、「鹵簿」とはこの時以前に既に作成され長らく規範とされてきた行列の次第であり、行事の実行にはその時の事情に合わせた変更が加えられる。この変更を図化したものが今回作成される「指図」であり、行成はこの「指図」を作るために先例を調べ、意見を徴収しているのである。

以上確認してきたように、「指図」とは文字のマニュアル（「式」）に対して図像で示すマニュアルの総称であり、儀式毎に毎回作り直されることがわかった。これらは、文字だけでは表現できない位置関係を示すものである。すなわち、「指図」は器物の配置や列席者の座位置を建物の柱を起点に図示することが目的であり、装束担当の蔵人などが畳や机の配置を決める時、列席者が自分の座る位置などを確認するために活用されたのである。おそらくは、「指図」には具体的な参列者氏名もその座位置と共に明記され、名簿としての機能も果たしたと思われる（『小右記』治安元年〈1021〉正月 16 日条など）。それゆえ、「指図」には基軸としての建物の柱が明記され、建物のうち儀式の場として使用される部分のみが示される。こうした指図は現地へ赴き現場を実見して作成したり（『権記』長保元年〈999〉８月 21 日条など）、過去の指図・絵図を元に机上で作成したり（『春記』長久２年〈1041〉２月 17 日条など）、過去の指図を利用しながら現地で調整したり（『中右記』承徳元年〈1097〉２月 11 日条など）して作成されていった。

行事装束の敷設に使用した指図は、本来は担当部局である蔵人所などで保管され故実として蓄積されたものと考えられる。これが後に『雲図抄』が編纂される基盤となるのだろう。一方で行事を担当した蔵人たちがその日記に記録することもあった。管見の限り日記の付図は、『親信卿記』天禄３年（972）７月７日条の乞巧奠における机・燈

の配置図、また同記天禄3年（972）8月20日条の御読経における清涼殿敷設図が初見である。しかし、周知の如く、行事の場が内裏空間から里内裏・摂関家邸宅などへ転換するにつれ、儀式空間の構造が敷設担当の蔵人らのみならず、儀式に列席する貴族達にも見慣れぬものとなっていく。こうした時に、当日の儀式に合わせた指図が広く必要となり、儀式空間の構造をあらかじめ周知させる手段として「指図」が機能する。こうした変化が、院政期以降広く貴族達が「指図」を日記に記録する契機となったと考える。

固禅が活用した指図に院政期以降のものが多いのは、古記録の残存状況によるのではなく、指図そのものの記録のされ方による。

6.2 『院宮及私第図』にみえる『明月記』

『院宮』には、都合12の古記録から指図が引用されている。『裏松家史料』には、それら古記録に対する固禅の研究のあり方の一端を示す文書群が存在するが、『院宮』の記述自体から検討を加える余地はまだ残されている。本節では、近年写本研究が急速に進んでいる『明月記』を取り上げる。『明月記』は記者藤原定家による自筆本が現存し、諸写本の間違いを比較検討するのに最適な記録である。

『院宮』には『明月記』より以下3点の図が引用される。〈51〉「大納言樋口大宮第図」、〈19〉「鳥羽城南二棟廊図」、〈28〉「織戸中門図」である（以上、年次順）。他に〈45〉「藤原定家の一条京極第」があるが、『明月記』の指図ではない。なお紙数の関係で、『院宮及私第図』の諸本および『明月記』各諸写本間の異同については詳述しない。

〈51〉「大納言樋口大宮第図」

建久7年（1196）4月24日条所収の、権大納言藤原定能邸で行われた賀茂祭使発遣儀の指図である。『明月記』諸写本において、弘筵の表現（格子模様）の影響か、柱表記に間違いが少ない。『院宮』諸本においては、古代学本が日記本文の「閑所方云々」を図に入れ込むミスを犯す。

〈19〉「鳥羽城南二棟廊図」

建仁2年（1202）5月26日条所収の、鳥羽離宮城南寺での鳥羽院主催による影供歌合の指図である。この『明月記』の記事の写本には二系統ある。すなわち『明月記』本文の写本と、室町期に『明月記』から和歌に関する記事を抜き出し作成された部類記『明月記抄　歌道事』の写本とである。後者の特徴の一つはこの建仁2年（1202）5月26日条の鳥羽殿図全体を線で四角く囲う点にある。『明月記』広橋家本がこの図の部分を空白とすることから、いずれかの写本でこの図が切り取られ（切り取られた本の書写が広橋家本につながる）、『明月記抄　歌道事』に貼り付けられ、それが転写されていったものと推察される。

『明月記抄　歌道事』における当図は、『明月記』諸写本に比較して指図としての正確さが保たれている。柱位置、柱間がほぼ揃っている。そして『明月記』諸写本では「題」と誤記されることが多い「影供」の「影」の文字が正しく理解されている点も指摘しておきたい。『明月記』写本では慶長年間に書写された紅葉山文庫本において「題」と誤写され、その間違いがこの系統の写本に踏襲されていった。

『明月記』の諸写本を比較すると、指図の書写のあり方が見えてくる。すなわち、同時代の人が日記に記録する時には、まず柱を先に図示し、その後で柱の間に人名を当てはめていったと考えられる。それゆえ、柱の位置はずれず、間隔も等間隔となる。当事者にとっては、人物や物がどの位置に置かれるか、その配置が重要なのであり、位置を示すために柱が図示されるからである。それに対して、後世の書写者にとっては、人名の書写が重要となる。人名の書写、配置に集中し、柱の図示には無関心となる。それゆえ、写本においては柱の数そのものも減り、位置がずれてしまう。古記録の指図の分析では、自筆本からどのように転写されていったかを考える必要がある。藤本孝一氏が指摘している方法であるが[文13]、正確に指図を転写するために針を使って柱位置を写し取ったとは限らないのである。

『院宮』写本では、東博本・宮内庁本が「影」を「題」と誤記する。またこの二写本は柱部分に不必要な撥ねを施す紅葉山文庫本と同じ特徴を持つ。一方、古代学本は「影」とするが、『明月記』自筆本に比して欠如部分が多い。

〈28〉「織戸中門図」

元久2年（1205）12月15日条所収の、内大臣藤原実宗家の元服儀の指図である。固禅は織戸に関心を持っていたらしく、『院宮』巻2に『法然上人絵伝』から図2点を収載している。『明月記』諸写本においては、「馬引入」の西の柱の書き方により書写の系統が推測できる。これは、紅葉山文庫本において墨が撥ねてしまったことの影響であるが、転写の過程で柱の意味が問われることなく、いわば模様として様式化していったことがわかる。

『院宮』においては、こうした無意味な撥ねや様式は排除されており、固禅が独自の判断を加えながら筆写していったと推察される。ただし古代学協会本は、図中の「織戸」、「馬引入」の文字を脱している。

以上示してきたように、『院宮』は『明月記』のどの写本を使用したかは特定できないものの、善本を活用できなかったことを確認した。冷泉家所有の自筆本はもちろんのこと、勅封解除の後享保6年（1721）頃に他家貸し出し用に冷泉為綱・為久が転写した本も見ていないと判断される。現在、写本のうちで善本とされる徳大寺本、野宮本とも記述に隔たりがある。江戸時代の公家にとって、『明月記』写本の善本を入手し書写することがいかに困難であったかは、辻彦三郎氏がすでに指摘するところであるが[文16]、固禅の故実研究の壁となったのは古記録善本入手であった。さらに〈45〉における『明月記』の記事を検討すると、この邸宅を考える上で重要であるはずの寛喜2年（1230）4月12日条などが引用されていない。これは、寛喜2年

の写本を入手できなかったことを示している。

こうした固禅の限界は、諸写本の検討の継続によって克服されうる。『大内裏図考証』が固禅およびその門下によって校訂を重ねより正確が期されたことを考えると、『院宮』も校訂を待っていた可能性もあろう。

7 『院宮及私第図』に用いられた絵巻物

『院宮』には絵巻物を参照して制作された指図が含まれる。また東博本巻4では絵巻物の模写を収録する。巻2も単なる模写ではなく、人物を省き建築のみを抜き描きにしたものが多く、固禅の建築資料の一部と考えられる。絵巻物が固禅の古代建築研究に重要な位置を占めていたことは明らかだが、どのような絵巻物を参照していたのか。本章では紙数に限りもあるので、東博本を中心に固禅の絵巻物の収集方法と絵巻の系統について、二-三の絵巻を例に検討を加えたい（表 7-1）。

7.1 絵巻物の選択と模写の方法

1) 絵巻の選択

『院宮』には10種の絵巻から8点の指図、46点の模写が収録される。巻頭に箇条書きにされた目録と、図ごとに付せられた表題により、絵巻の名称と場面が知られる。そのうち『年中行事絵巻』の原本、『伴大納言絵巻』はともに12世紀後半の作で、実際に古代の風俗や風景を反映していると思われる。ところが『石山寺縁起』『なよ竹物語絵巻』『後三年合戦絵巻』は14世紀作とされており、制作年代に大きな開きがある。固禅はこれらの絵巻物をどういう基準で選んだのであろうか。

『年中行事絵巻』は『古今著聞集』にある説話から、後白河院（在位 1155-58、没年 1192）が制作を命じたことがよく知られている。また『石山寺縁起』で採用された式部少輔国能邸の場面は、詞書によれば天治年間（1124-6）の話を描いたもの。『なよ竹物語絵巻』は後嵯峨天皇（1242-6 在位）の逸話、『後三年合戦絵巻』は永保3年（1083）の戦、『伴大納言絵巻』は貞観8年（866）の応天門事件、『小柴垣草子』は寛和2年（986）の宮廷のスキャンダルに取材する。『法然上人絵伝』の法然は長承2-建暦2年（1133-1212）の在世、『北野天神縁起絵巻』の「菅公化現」は、菅原道真（845-903）が5・6歳の時の場面である。すなわち固禅の集めた絵巻物の場面は、9世紀中頃から12世紀中頃までの出来事を描いた図ということになる。

後述のように固禅は多くの模本に接し、より原本に近い模本を求めたが、原本の制作年代について厳密に判定することはできなかった。固禅の参照した絵巻が『院宮』と『大内裏図考証』を合わせても15種しかないのに対し、寛政7年（1793）に松平定信が編纂した『古画類聚』は55種もの絵巻を用いている。定信の行動範囲が広く、専門絵師を派遣して組織的効率的に模写を行っているのに対し、塾

表 7-1 『院宮及私第図』東博本所載の絵巻物一覧

図番号	頭文目録	参照した絵巻の系統と引用箇所	原本の制作年代	備考
	其一(巻1)			
23	大臣第[年中行事画載餅]図	「年中行事絵巻」巻10の1～9紙「六月祓」	原本は1157-79、現行本では1626	平面図
	其三（巻3）			
38	[年中行事画]仙洞図	「年中行事絵巻」巻1の35～44、53-62紙「朝覲行幸」合体	原本は1157-79、現行本では1626	平面図・2場面を合成
39	[同]又	「年中行事絵巻」巻6の1～10紙「大響」（臨時客の貼紙あり）	原本は1157-79、現行本では1626	平面図
57	[年中行事画]寝殿図	「年中行事絵巻」別本巻3の8～11紙「安楽花」（朽ち果てた邸）	原本は1157-79、現行本では1626	平面図
58	[石山寺縁起] 式部少輔国能第図	「石山寺縁起絵巻」巻5の12～18紙、1段3図目（藤原国能邸）	1324-26	平面図
59	[奈与竹物語] 陰陽師文衡家図	「なよ竹物語絵巻」曇華院本系絵8段（陰陽師邸）	14世紀半ば	平面図
60	[同] 鳴渡少将第図	「なよ竹物語絵巻」曇華院本系絵10段（三条白川少将邸）	14世紀半ば	平面図
62	[証空絵詞] 三井寺智空坊図	「泣不動縁起絵巻」奈良博本（智興の坊）	14～15世紀	平面図
	其二（巻2）			
64	[年中行事画]仙洞図	「年中行事絵巻」巻1の53～62紙「朝覲行幸」（法住寺殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略・打出のみ
65	[同]又	「年中行事絵巻」巻1の40～43紙「朝覲行幸」（法住寺殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物・木を省略
66	[同]関白第図	「年中行事絵巻」巻6の1、3～10紙「大饗」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略
67	[年中行事画]大臣第図	「年中行事絵巻」巻10の25～30紙「大饗始」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物・幕を描写
68	[年中行事画]斎院御禊図	「年中行事絵巻」別本巻2の8段21～30紙「大臣大饗」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を描写
69		「年中行事絵巻」鷹司本巻2の1段「大饗蘇甘果使」	原本は1157-79、現行本では1626	人物を描写
70		「年中行事絵巻」巻10の10～13紙「是ヨリ大饗」	原本は1157-79、現行本では1626	人物を描写・建物なし
71		「年中行事絵巻」鷹司本巻2の3段「牛飼饗」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を描写
72		「年中行事絵巻」鷹司本巻14の2段「斎院御禊東河の儀」	原本は1157-79、現行本では1626	人物・幕を描写・建物なし
73	北野縁起図	「天神縁起絵巻」弘安本系宮内庁6巻本の道真化現	15世紀	人物なし
74	石山縁起図	巻5の13～17紙	1324-26	人物を描写
75	[亀山院画合巻]院御棧敷図	不明		一部人物を描写
76	[年中行事画]紫野斎院図	巻2の16～23紙「関白賀茂詣」（下社馬場舎）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略・木あり
77	[同]立遣所酒部所図	巻10の20～24紙「大響」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略・内出と幕あり
78	[同]渡殿階図	巻10の29紙途中～30紙始め「大饗始」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略
79	[同]庶庇図	「年中行事絵巻」鈴鹿家旧蔵本第2段「春日祭使出立　列舞」（東三条殿）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略
80	[法然絵詞]有高欄門図	「法然上人絵伝」巻16の9紙（四天王寺）	1317～73年頃	人物を省略
81	[年中行事画]御棧敷図	「年中行事絵巻」巻16の1～21紙「賀茂祭行列」	原本は1157-79、現行本では1626	一部人物を描写
82	[同]三間四面寝殿以下図	「年中行事絵巻」巻3の12紙～22紙「闘鶏」	原本は1157-79、現行本では1626	人物・幕を省略
83	[灌頂巻]野宮図	「小柴垣草紙」		人物を省略
84	[法然絵詞]釣殿図	「法然上人絵伝」巻8の5段目15紙	1317～73年頃	人物なし
85	[同]織戸中門図	「法然上人絵伝」巻12の1段目3紙	1317～73年頃	人物なし
86	[同]押小路殿寝殿図	「法然上人絵伝」巻9の3～4紙	1317～73年頃	人物を省略
87	[年中行事画]大門中門図	「年中行事絵巻」巻10の3～6紙「六月祓」	1157-79	人物を省略
88	[法然絵詞]車宿図	「法然上人絵伝」巻12の16紙	1317～73年頃	人物なし
89	[同]板葺棟門図	「法然上人絵伝」巻14の19紙	1317～73年頃	人物なし
90	[同]織戸中門図	「法然上人絵伝」巻9の20～21紙	1317～73年頃	人物省略
91	（空欄）	「法然上人絵伝」巻42の18紙	1317～73年頃	人物を省略
92	[同]筆士門図	「法然上人絵伝」巻30の9紙	1317～73年頃	人物なし
93	[同]又	「法然上人絵伝」巻29の16紙・22紙（同形）	1317～73年頃	人物なし
94	[同]平門図	「法然上人絵伝」巻33の9紙	1317～73年頃	人物なし
95	[伴大納言草子]伴大納言第図	「伴大納言絵巻」下巻10紙途中～11紙途中	1160-80年頃	人物を省略
96	[年中行事画]左近馬場図	「年中行事絵巻」巻8の4（省略有）～7紙「騎射」（左近大殿屋）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略
97	[同]右近馬場図	「年中行事絵巻」巻8の16紙の途中～27紙「騎射」（右近大殿屋）	原本は1157-79、現行本では1626	人物を省略・木あり
98	[後三年軍記]陸奥国々府図[二]	「後三年合戦絵巻」上巻3段15～17紙	原本は1171現行は1347	人物・鳥を省略
99		「後三年合戦絵巻」下巻5段24紙	原本は1171現行は1347	人物を省略
	其四（巻4）			
100		「年中行事絵巻」巻8の14、15～29「騎射」	原本は1157-79、現行本では1626	人物を描く

凡例：「年中行事絵巻」は諸本により巻、段の数え方に異動が多いため、ここではたびたび刊行され広く知られている住吉家旧蔵本および住吉家旧蔵本別本（ともに東京国立博物館蔵）による巻、紙数を示した。同様に「法然上人絵伝」は知恩院本、「後三年合戦絵巻」は東京国立博物館本、「石山寺縁起」は石山寺本、その他はそれぞれ表に示す諸本の紙数を示している。いずれも表中に示した諸本から直模したという意味ではない。絵巻成立年代欄には同一内容の絵巻諸本の中で、原本あるいは最古と思われる本の年代を示した。備考欄に「人物を省略」とあるのは人物を省略して描いているもの、「人物なし」とあるのはもともと人物のない場面であることを示す。

居中の固禅は行動が限られ、個人的なつながりを頼って資料収集を行っていたことを思わせる。

2)　指図制作と模写の手法

『院宮』の指図は階段の級数、縁の板の枚数など元の絵巻物に忠実に描かれる。また〈62〉の『泣不動縁起絵巻』による図では、類推して描いた部分を墨線で囲み、「コレホドハ絵ニナシ隔リテミエズ　サレドモ構像可如此故ニ図スル也」と記し、固禅の推定部分を明記している。

『院宮』諸本の中で東博本のみが絵巻の模写を付帯する。この模本は固禅の意図によるのか、という疑問が生起する。『大内裏図考証』は一つの建物に関してさまざまな資料を提示し、最後に指図を掲載するという構成である。『院宮』は「図集」が目的であった。とすると東博本に含まれる模写は、膨大な資料集の一部がともに伝わり、同じ表具をほどこされるに至り、一連のものとされ、巻数などが不明になったものと思われる。後述のように模本に錯簡が見られることはそのことを強く思わせる。

東博本の絵巻模本は情報の量により三種に分かれる。一つ目は、もとの絵巻をそのまま写しとったもので、〈74〉『石山寺縁起』に見るように、人物・馬・木石がすべて忠実に描かれる。この方法は、生活や儀式の場において建築がどのように用いられ、装束されるのかを知るには最良の方法といえよう。しかし技術と時間を要し、とくに『年中行事絵巻』のように大量の人物が描かれているものは、模本そのものを購入したのではないかと思われる。

二つ目は建築のみを抜き書きしたもので、〈95〉『伴大納言絵巻』など人物を省略して描写する。この方法は建築の参照には最も見やすいという利点があり、先の完全な模本からの作成もあったろう。しかし所蔵者から借り受け、模写に出向くなど時間的制約がある場合、必要最低限の模写に留めることもあったのではないか。東博本では『年中行事絵巻』の同一場面が２種類の方法で収載される。後述のようにそれぞれの元本は別と考えられ、それぞれ異なる状況下で異なる模写の手法が選択されたことを窺わせる。

三つ目は建築や建具の一部分のみを抜き書きしたもので、巻２では『法然上人絵伝』から車宿、織戸門、平門などが、上下２段の小画面に描かれる。『法然上人絵伝』は四十八巻系統と考えられ、その量の多さから、当初から部分的な模写が選択された可能性が高い。その場合、第一次の模写は小型の紙に描かれ、巻数などの注記も伴っていただろう。『院宮』ではそれらをさらに写して編集配置したものと思われる。さまざまな段階のものが混在する東博本巻２と巻４は、平面図制作のための資料を、錯簡のあるまま集成したものであろう。

7.2　絵巻の系統

絵巻物は古来より愛好され、他所からの借覧、時に模写がしばしば行われた。『院宮』所収の絵巻物についても、『伴大納言絵巻』『年中行事絵巻』『石山寺縁起』『後三年合戦絵巻』『法然上人絵伝』『泣不動縁起』は15-16世紀の記録類にあり、早くからその存在が知られていた。

模写については『看聞御記』永享４年（1432）９月６、８日条に、内裏の『年中行事絵巻』の１年にわたる借り受け、模写が記される。禁裏から長期間借り出せたのは、伏見宮貞成親王が後花園天皇の父という特別な立場による。絵筆を執ったのは伏見宮家に仕える承仕の清賢で、絵心があるというので命ぜられた。専門絵師によらないこうした模写も含め、近世には多くの模本が諸家に所蔵されていた。

『院宮』の絵巻の図を検討したところ、今日では失われた本や一般に知られていない本を参照した例が見られた。以下に固禅の参照した絵巻についてその系統を追跡する。

1)　『年中行事絵巻』の系統

『院宮』で最多の絵が採用される。４点の平面図に加え、東博本では19場面の図様が収録される。原本は寛文元年（1661）焼失するが、それ以前に模本が多く作られていたと思われ、今日各所に断片的な模本が残る。それら模本の中で最大のセットは寛永３年（1626）住吉如慶らにより写された住吉家本16巻である（現田中家蔵）。

しかし『院宮』採用の図には住吉家本にない図柄が多く含まれる。鷹司家本（宮内庁書陵部蔵）と一致する場面が３点、鈴鹿家旧蔵本のみにある場面が１点など諸本を参照したことを思わせる。『院宮』巻２、巻４の図は住吉家本、鷹司家本の図の上方を続けて描く。すなわち住吉家本や鷹司家本で切落とされている部分が『院宮』には描かれているのである。『院宮』元本を探る手がかりの一つとなろう。

また『院宮』巻２、巻４はともに、『年中行事絵巻』巻８「騎射」の同一場面を収載する。巻４は人物などをすべて写した模写、巻２は人物を省略し建物のみを抜き出した模写である。しかし巻２は巻４から人物を抜いて作成されたものではない。たとえば建物の欄干の描写など、巻２の方が詳しく正確に描かれる。逆に巻２が建物を参照するための図とすると、あってはならない間違いもある。巻４では描かれる屋内の壁と床の境界線が、巻２では描かれないのである。諸本の細部と比較すると、巻４は京大本、巻２は住吉家本と一致点が多い。しかし相互に類似点が入れ込み、巻２、巻４の直接の元本は現状では明かにしえない。

さらに『年中行事絵巻』巻10から写された図が４点あるが、中には建物を描写しない図も含まれる。４点の図を住吉家本に従って並べると、巻頭から巻末まで一部を除いてすべて揃う。建物のない長い場面が含まれるということは、この模本がもとは首尾完結したものであることを示唆する。住吉家本によれば欠落部分には紫宸殿の描写が描かれていて、清涼殿などと共に別置されていたと思われる。

なお〈76〉の巻２「関白賀茂詣」、〈79〉の「春日祭使出立」、〈81〉の巻16「賀茂祭行列」は、現在離れた場所に

配されるが、宮内庁書陵部本『賀茂詣図』と一致する。『賀茂詣図』は『年中行事絵巻』の一部ともいわれ[文17]、今後これらの絵を整理することにより、『年中行事絵巻』成立時の形態を復元する手がかりが得られると考えられる。

2)　『なよ竹物語』の系統

〈59〉〈60〉の頭文目録の「奈与竹物語」は、『なよ竹物語絵巻』『鳴門少将物語』として知られる絵巻である。14世紀作で国指定の金刀比羅宮本には「蔵中衍中、以比禁方、資宮殿服飾之制」（衍＝箱の意）とする源孝之の寛政 12年（1800）の奥書があり、固禅の観覧を思わせる。

しかし金刀比羅宮本と『院宮』の図では、異なる部分が散見する。たとえば白川少将邸の場面は、金刀比羅宮本が門のすぐ内側に主屋を描き、『院宮』は棟門と主屋の間に板塀を描く。逆に金刀比羅宮本にある唐戸が『院宮』では描かれない。『院宮』で参照された『なよ竹物語絵巻』は金刀比羅宮本ではないことが明らかである。

『なよ竹物語絵巻』の諸本は金刀比羅宮本の系統と、曇華院本の系統に分かれる[文18]。曇華院本系統の白川少将邸の場面には、棟門と居室の間に塀が描かれ、まさに『院宮』の図と一致する。曇華院本系統には鷹司家本（宮内庁書陵部蔵）など４本が現存し、記録から土佐家伝来の『なよ竹物語絵巻』粉本も曇華院本であったと考えられる[注7]。さらに固禅の作業を補佐した藤貞幹は、『好古小録』で「奈与竹ノ草子」について、「模本異同アリ。余ガ所蔵古本ニシテ誤写ナシ」と、模本の所蔵を記す。固禅参照の本は現状では明らかにできない。曇華院本系統の絵巻に絞り、さらに検討を重ねる必要がある。

3)『泣不動縁起絵巻』の系統

〈62〉の頭文目録は「証空絵詞」である。これは『泣不動縁起絵巻』あるいは『不動利益縁起絵巻』と称する絵巻物にあたる。東京国立博物館本（14世紀作、国指定）は、三井寺智興の居室のみを大きく捉え、『院宮』の築地、門、檜皮葺の中門廊などを描かない。部屋の細部も異なる。一方、『泣不動縁起絵巻』は東博本系統の他に清浄華院本の系統があり、『院宮』は清浄華院本のものと一致する。

『院宮』の表題下に「土佐光茂筆　光茂者光信子也」とある。清浄家院本系統の奈良国立博物館本は、巻２巻末に土佐光成（1647-1710）による極め、「土佐光信嫡子（略）土佐光茂筆」がある。藤貞幹は『好古小録』で現東博本系統の残欠[注8]、光茂筆２巻本、清浄華院本の３種を紹介し、清浄華院本について「琢磨所写ト云。余不観之。」と記す。固禅のみた本が光茂筆とされる奈良博本の可能性は高い。

ところで『院宮』には次のような注記がある。「按土佐光茂子某幸于軍中其家没落故今世粉本不伝者多也　於光茂已前者家伝古来殿舎制［云々］故至近代画図者難採用」。すなわち「土佐光茂の子以降、土佐家は没落したため古い粉本が少ない。光茂以前には古来殿舎の制が伝わっていたが、近年の画図は採用できない」という。これは『院宮』の『泣不動縁起絵巻』が光茂の図で、信頼すべき資料であることを記したものと考えられる。この記載は固禅の土佐家粉本への評価を示唆していて興味深い。

7.3　固禅の絵巻探索

固禅は、『年中行事絵巻』では同じ場面で複数の本を参照していた。〈95〉に『伴大納言絵巻』があるが、固禅が良本を求めて奔走したことが次の史料にみえる。

『伴大納言絵巻』（出光美術館蔵）は近年まで若狭の酒井家に伝わったが、その付属文書の一つから寛政年間に禁裏がこの絵巻を借覧したことが明らかになる。

> 伴善男絵巻物右造内裡之節、秘府の画図者勿論、諸家伝来之旧図。偏被召之雖祐種類許多、模写或略不足拠信処、裏松入道固禅言上酒井修理大夫僕従所蔵之古画図、為分明由、嘗伝聞旨、依之就酒井家有由緒。可被召進之由被蒙仰・・（後略）

寛政度内裏造営のため、諸家伝来の古画を集めたが良本が無かった。固禅が「酒井家の家臣の本が分明だと聞いてる」と言った。同家に提出させたところ素晴らしいものだったので絵所にも写させた、というのである[注9]。固禅は多くの資料を収集したが、模本には写し崩れが多く、より原本に近いものを求めた。内裏造営という絶好の機会を捉え、禁裏の権威を背景に地方の絵巻を借り集めたのである。

その寛政度内裏造営に際し『伴大納言絵巻』が宮中にもたらされた時期は、『御指図御用記』（宮内庁書陵部蔵）によると造営の準備段階にあった天明８年６月まで遡り、さらに同記では寛政２年４月に確認できる。しかもその時の絵巻は若狭酒井家の『伴大納言絵巻』原本の可能性が高い。

『院宮』収載の『伴大納言絵巻』は釘隠が省略され、蔀戸の格子がなく、御簾を誤って格子戸のように描く。参照した本には大きな写し崩れがすでにあり、構造が理解できなかったことが分かる。そこで原本が京都にもたらされる以前、すなわち『御指図御用記』が記す寛政２年４月以前に作成されたことが推察されるのである。

8　おわりに

本研究では『院宮』の諸本のうち東博本に注目しつつその概要を明らかにするとともに、固禅の住宅研究、学問のあり方について『院宮』を通して検証した。そこには限界が存在するとはいえ、古記録を博捜し、指図に検討を加え、また絵巻の模写にあたってはより良本を求めて複数本を参照、原本を取り寄せることもあったなど、固禅の学問は業績内容はもとより、その手法においてもきわめて高いレベルにあったことが明らかとなった。

さて、『院宮』はこれまで住宅史研究の中で断片的に資料として活用されはしたが、本格的な分析はなされていな

かった。そのため本研究ではまず全体像の通覧と概要把握を行った。『院宮』収載の図・記事のうち、一部については本研究に関連して分析を進めてきたが[文8)文14)]、今後も継続・深化させる必要がある。また先に触れたように、本研究の過程で『院宮』とその一部が内容的に重複する他資料の存在を確認した。また『院宮』に他の写本が存在する可能性もある。そしてさらに『院宮』自体はその中に見出せないとはいえ、現在整理中の『裏松家文書』は、固禅の研究実態を解明するための不可欠の史料群であり、『院宮』に関して新たな知見が得られることも考えられる。その『院宮』は、住宅史研究の分野に大きな影響を与えた裏松固禅の業績の、一片に過ぎない。固禅の研究の全貌に迫るための研究は、緒についたばかりであるといって過言でなく、今後なすべき作業、究明すべき課題は多い。

謝辞　史料の調査・閲覧に際し、東京国立博物館、宮内庁書陵部、古代学協会、京都文化博物館、東北大学附属図書館、東京大学史料編纂所、東京大学附属図書館、国立公文書館、国文学研究資料館、同史料館、東京芸術大学大学美術館、国立国会図書館、京都大学附属図書館、京都府立総合資料館、京都女子大学図書館（順不同）など多くの諸機関にご配慮いただきました。ここに記して謝意を表します。

＜注＞

1)　古代学本については、参考文献5、6、9のほか、参考文献11の「院宮及私第図」の項（藤本孝一氏執筆）、参考文献11の「院宮及私第図」ならびに「裏松固禅編『院宮及私第図』略目録」（竹居明男氏作成）。上・下巻は参考文献11に従う。

2)　固禅自筆の清書本で、固禅が『大内裏図考証』とともに松平定信へ献上したものという藤本氏の説に対し、詫間氏（参考文献3）はその『大内裏図考証』を固禅没後の写本とする。筆致は『大内裏図考証』自筆本と比較して近似するが、『大内裏図考証』に比べ筆圧が一定せず、また固禅の研究を補佐した人物であれば固禅の筆に似るという可能性もある。かように古代学本を自筆本とするにはなお検討を要する。

3)　東博本『院宮』巻3と同じ内容を有する『本槐門新槐門図』宮内庁書陵部蔵（鷹司家旧蔵、整理番号　C8函111号）、『本槐門新槐門之図』東北大学附属図書館蔵（整理番号　巻子262癸A-4-262）など。後者は日本画家竹内栖鳳（1864-1942）の蔵書「竹内文庫」の一つであった。なお伝来の経緯など詳細は紙幅の都合上ここでは割愛し、別の機会に検討する。

4)　伝本は東博本と古代学本の二種との指摘がすでにある（注1前掲「院宮及私第図」の項）。

5)　それをもとに固禅が鷹司家の新造寝殿の指図を描いたのは11月であった（東京大学史料編纂所『裏松家史料』）。

6)　たとえば参考文献13は、『院宮』を「裏松固禅が、院や私邸関連記事を古記録類から復元した図面集」とし、「定家邸も復元している」と記す。

7)　粉本は絵師が絵を描く時の参考にする絵画資料。『御指図御用記』寛政元年2月23日条に土佐光貞が自家の『なよ竹物語』からクロロ（栓）の有る唐戸図を写し提出している。この図は曇華院本系統にしか描かれない。

8)　藤貞幹は各段の詞書の字句を写しており、東博本系であることが推定できる。

9)　『伴大納言絵巻』は江戸初期には酒井家にあったが、その後家臣の所有するところとなり、寛政年間に禁裏から返却された際、酒井家に留め置かれそのまま伝えられた。

＜参考文献＞

1)　川本重雄「書評　太田静六著『寝殿造の研究』を批判的に読む」『建築史学』第9号、1987年。
2)　川本重雄「寝殿造と書院造」（鈴木博之ほか編『古代社会の崩壊』東京大学出版会、2005年）。
3)　詫間直樹「裏松固禅の著作活動について―『大内裏図考証』の編修過程を中心として―」『近世公家社会における故実研究の政治的社会的意義に関する研究』（2002-2004 年度科学研究費補助金　基盤研究（B）（一般）研究報告書、研究代表吉田早苗）、2005年3月、初出『書陵部紀要』55号、2004年。
4)　『裏松家譜』（東京大学史料編纂所蔵）
5)　藤本孝一「裏松固禅編　院宮及私第図　（清書本）二巻」『土車』44号、1987年。
6)　藤本孝一「藤原定家・一条京極邸と『院宮及私第図』の復元」（『都という文化』〈歴史文化研究第2号〉おうふう、1995年）。
7)　西村慎太郎「寛政期有職研究の動向と裏松固禅」（参考文献3報告書所収）、2005年。
8)　藤田勝也・宮崎隆志「「東三条殿図」について―『院宮及私第図』に関する研究1―」『日本建築学会計画系論文集』591号、2005年。
9)　藤本孝一「裏松固禅編『院宮及私第図』（清書本）2巻」『古代文化』39巻11号、1987年。
10)　黒川真頼『訂正増補　考古画譜』巻11（『黒川真頼全集　第二　訂正増補考古画譜　下巻』国書刊行会、1910年）。
11)　角田文衛監修古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店、1994年。
12)　角田文衛監修古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典資料・索引編』角川書店、1994年。
13)　藤本孝一『日本の美術454　『明月記』巻子本の姿』至文堂、2004年。
14)　藤田勝也「「寝殿図」の由来と影響」『日本建築学会計画系論文集』597号、2005年。
15)　後藤久太郎「古代・中世の指図と絵図（概論の1）」『宮城学院女子大学生活科学研究所　研究報告』第28号、1996年。
16)　辻彦三郎『藤原定家明月記の研究』吉川弘文館、1977年。
17)　相馬万里子「「山寺参詣図」という絵巻」（『絵巻　日本絵巻物全集月報』角川書店、1978年。
18)　平林文雄『なよ竹物語研究並に総索引』白帝社、1947年。
・　川上貢『建築指図を読む』中央公論美術出版、1988年。
・　濱島正士「指図と建築割図について」（『古図にみる日本の建築』至文堂、1989年）。
・　藤原重雄「行列図について」『古文書研究』第53号、2001年。

＜研究協力者＞

植松　清志　　大阪人間科学大学　教授
谷　直樹　　大阪市立大学大学院　教授
西山　良平　　京都大学大学院　教授　　（50音順）
平山　幸　　福井大学大学院　修士課程
鈴木　香依　　福井大学　学生
田中　洋子　　福井大学　学生

＜執筆分担＞

藤田（1-5、8および全体の統括）、京樂（6）、岩間（7）。